

2022年 教師のためのことばセミナーのご案内

一般財団法人ラボ国際交流センター 東京言語研究所

東京言語研究所では過去9回にわたり、「教師のためのことばワークショップ」を開催し、「ことばへの気づき (metalinguistic awareness)」の概念を中核としたワークショップを行ってきました。そして昨年は趣向を変え、「教師のためのことばセミナー」として、「ことばへの気づき」に関する講義を中心としたものを企画しました。また、新型コロナ状況であることを考え、開催形態もZoomを利用したオンライン形式を採りました。各回の講座には他の日担当の講師陣も参加し、ディスカッションも深まりました。そこで、本年も引き続き「教師のためのことばセミナー」形式で開催します。

受講者としては小中高大の先生をはじめ、教員志望者、社会人など、いろいろな背景を持つ方々を想定しています。皆様のご参加をお待ちしております。

講義形態：ZOOMによるオンライン講義(生配信)

受講料：12,500円(消費税込) 全5回 ※1日単位の申込受付は行っていません。

申込受付期間：9月9日(金)10:00AM~10月11日(火)10:00AM

(受講料振込締切：10月11日(火))

日程・講義テーマ・担当講師は次のとおりです。

10月16日(日)ことばへの気づき概論と小中高大校種別対応可能性 (大津由紀雄・関西大学)
10月30日(日)ことばへの気づきを利用した小学校での授業実践 (北野ゆき・守口市立さつき学園)
11月20日(日)ことばへの気づきを利用した大学での授業実践 (向後朋美・十文字学園女子大学)
12月04日(日)ことばへの気づきを利用した国語科と英語科の連携 (柁木貴之・北海学園大学)
12月18日(日)学校教育の視点から見た、ことばへの気づき (巨理陽一・中京大学)

いずれも午前10時から正午までの120分です。講義90分、ディスカッション30分の時間配分を考えています。

お問い合わせ 一般財団法人ラボ国際交流センター 東京言語研究所

E-mail: info@tokyo-gengo.gr.jp

Tel: 03-6233-0631(平日10:00~17:00/木曜日除く)

10月16日(日)第1講

ことばへの気づき概論と小中高大校種別対応可能性

(大津由紀雄・関西大学)

第1講では、今回の企画趣旨について説明した後、「ことばへの気づき (metalinguistic awareness)」とはなにかということについて事例をできるだけ多く挙げながら説明します。

たとえば、野党議員から「総務大臣はNTTから接待を受けたことはありますか」と問われた総務大臣が「国民から疑念を抱かれるような会食会合、そうしたものに応じたことはございません」と答えたことをご記憶でしょうか。この「国民から疑念を抱かれるような会食会合」の部分が2とおりの解釈を持ちうることに気づきになったでしょうか。

「ことばへの気づき」を育み、ことばに対する感性を磨くことによって、思考を研ぎ澄ますことができるようになります。同時に、悪意の相手からだまされるのを回避することもできるようになります。

「ことばへの気づき」について概観したあと、言語教育にとってことばへの気づきがどのような意味を持つのかを解説します。その際、小中高大の校種別対応可能性についての試案を提示します。その過程で言語教育の目的（「なぜ言語教育を行うのか」という問いに対する答え）についてお話しします。最後に、第2講から第5講までの内容について予告をします。

なお、ここで「言語教育」と呼んでいるものは、母語教育（日本の学校教育で「国語（科）教育」と呼ばれているもの）と外国語教育の両者が有機的に連携された、ことばに関する教育を指します。この辺りについても第1講で説明します。

大津由紀雄 講師プロフィール

慶應義塾大学名誉教授、関西大学・中京大学客員教授。文部科学省「言語力育成協力者会議」、「英語教育の在り方に関する有識者会議」のメンバー。言語教育関係の著書に『ことばの力を育む』（慶應義塾大学出版会、2008年、窪園晴夫との共著）、『日本語からはじめる小学校英語---ことばの力を育むためのマニュアル』（開拓社、2019年、浦谷淳子・齋藤菊枝との共編著）など。

10月30日(日)第2講

ことばへの気づきを利用した小学校での授業実践

「ことばってこうやって考えてみたら、めっちゃ面白いなあ、先生」

(北野ゆき・守口市立さつき学園)

小学生は行ったり来たりしながら学んでいきます。いろんな教科を行ったり来たり、知っていることと新しく知ることの間を行ったり来たり、自分の考えと人の考えを行ったり来たりしながら、最後は学んだことをもう一度自分のことばにすることで、「当たり前」とスルーしていたことが、実は当たり前ではなかったということに気づいていきます。それが学びを深めていきます。

小学校の外国語学習でも同じです。外国語の授業で母語（日本語）を外から見てみる体験をすることで、母語（日本語）の理解をより深めることができます。そして「ことばっておもしろいなあ」と感じ、ことばへの感度を高め、ことばを大事にする態度が養われるのです。それが生涯にわたって外国語学習を続ける力になるのではないかと思います。

子どもたちが「だから英語をカタカナにしても上手に表せなかったのか」「（ローマ字学習を通して）日本語の発音を知った」「文字には歴史がかくされている」「変わってる文字を調べていったけれど、実は変わっている文字なんてない。日本語だって外国から見たら変わってる文字って思われているのかもしれないし」「ぼくは今まで外国語を学んできて、英語はとてもおもしろいと思いました。でも今日、日本語はとてもおもしろいと思いました」というふりかえりを書いた、アルファベットとの出会い、ローマ字からの気づき、多言語を使っての学び、文字プロジェクトなどを紹介します。

北野ゆき 講師プロフィール

大阪府守口市立錦小学校教諭 現在5年生担任。ホテル勤務、専業主婦を経て現職。昨年度までは小中一貫の義務教育学校勤務。

「食育と外国語教育をつなぐ給食プロジェクト」（2022年） 「授業実践記録教科横断型授業を利用したローマ字指導」（2018年） 「自立学習から世界の問題に繋げるチョコレートプロジェクト」（2019年）
[NEW HORIZON Elementary（東京書籍）] 『ワクワクする小学校授業の作り方』（共著、大修館書店、2019年）、『“先生”のための小学校英語の知恵袋—現場の「？」に困らないために』（共著、くろしお出版、2018年）

11月20日(日)第3講

ことばへの気づきを利用した大学での授業実践—母語を利用した外国語教育の基盤の形成

(向後朋美・十文字学園女子大学)

第3講では、小学校と中高英語の2種類の教員免許取得を希望する学生向けに行っている「ことばへの気づき」を利用した授業を紹介しします。

授業の対象者のほとんどが中学校ではなく小学校の教員を目指しているので、これまでの授業では小学校の国語の検定教科書で扱われている「言葉に関する事項」に関する題材を取り上げていました。今年度は国語の教科書で扱われている事項よりも根源的で、外国語教育の基盤を形成するのに役立つ概念（例えば、品詞、動詞の項構造、文の種類など）に焦点をあてて授業を行う予定です。学生は外国語として英語をすでに6年以上学習しているので、これらの概念についてはぼんやりとではあっても一応の理解はあると考えられますが、母語を利用してじっくり分析した経験は少ないと思います。そのような学生を対象に大学でどのような授業実践ができるのかについて、指導案、実践の様子、学生の反応などを紹介しつつ考えたいと思います。

学生のことばへの気づきを高める授業に加え、自身が教える立場になった場合に小学生のことばへの気づきをどのように高めていきたいかという視点から、学生と企画した、小学校4～6年生向けの「ことばへの気づき」を利用した講座を通しての実践も紹介します。

向後朋美 講師プロフィール

十文字学園女子大学教育人文学部児童教育学科教授。「ことばのしくみ」「英語学」「ことばへの気づきワークショップ」「英語科教育法」などの授業を担当。

『要点明解 アルファ英文法 新装版』（研究社、2017年、宮川幸久・林龍次郎編、小松千明・林弘美との共著）

12月4日(日)第4講

ことばへの気づきを利用した国語科と英語科の連携—その歴史、方法、実践

(柁木貴之・北海学園大学)

第4講では、ことばへの気づきを利用した国語科と英語科の連携について、歴史、方法、実践を説明します。講義の前半は歴史と方法についてです。「連携」に向けた議論の歴史は古く、明治期から存在します。これまでに最も古い資料と考えられているのは、岡倉由三郎「外国語教授新論」(1894)です。また、ことばへの気づきを利用した「連携」に関しては、語学教育研究所が『外国語教授法』(1943)の中で提案を行っています。その後も今日まで連綿と続く議論を眺めた後、「連携」の方法について考えます。具体的には、国語科と英語科で共通目標を定めた上で、共通教材や共通活動を設定する方法に注目します。

講義の後半では「連携」の実践を紹介します。2000年以降、「連携」の議論が高まり、2022年までに少なくとも13校が「連携」と銘打った実践を行っています。どの実践も「メタ言語能力の育成」「日本語と英語の特徴の理解」など、言葉は様々ですが、ことばへの気づきと関連する内容です。例えば、次のような実践が報告されています。

・「私は、黒い目のきれいな女の子に会った」という曖昧文を用いた実践

・松尾芭蕉「古池や」とその英訳を用いた実践

・『百人一首』とその英訳を用いた実践

・夏目漱石『こころ』とその英訳を用いた実践

このような実践例について、実際の英文に即して考察を行います。そして今後、ことばへの気づきを目標にどのような実践が可能か、一緒に考えていきたいと思います。

柁木貴之 講師プロフィール

東京大学大学院総合文化研究科博士課程修了。博士(学術)。著書に『国語教育と英語教育をつなぐ—「連携」の歴史、方法、実践』(東京大学出版会、近刊、第3回東京大学而立賞受賞作)、『メタ言語能力を育てる文法授業—英語科と国語科の連携』(ひつじ書房、2019年、秋田喜代美、斎藤兆史、藤江康彦との共著)など。

12月18日(日)第5講

学校教育の視点から見た、ことばへの気づき

(巨理陽一・中京大学)

中学校3年の英語の教科書にキング牧師についての物語文があります。Martin Luther King Jr.です。一方、社会科では宗教改革を進めたルターが登場しますが、キング牧師（と彼の父）の名が彼と全く同じ綴りで、まさにマルティン・ルターその人に因むものであることを私が知ったのは、ずいぶん後のことです。

もう一つ、私が育った北海道には、北広島や新十津川などの入植者の出身地に因む地名が多くあります。アメリカにも、New HampshireやNew Jerseyなど、イギリスの地名に因む名前と同様の現象を確認できます。一方で、Los AngelesやSan Franciscoなど、西海岸に英語っぽくない地名が多いのはなぜか。北海道には、札幌をはじめとして、アイヌ語に由来する地名もたくさんあります。幌・別・内といった漢字を含む地名を集めると共通する意味が見えてくるかもしれません。

このように人名・地名はことばの歴史と変遷の宝庫で、教科をまたいでそうした言葉を取り上げる機会、そのことによって授業がより豊かなものとなる可能性は学校教育の中に遍在しています。

第5講では、上記の教科横断的な視点に加え、特に、ことばへの気づきに関して学校教育の中で見過ごされがちな談話レベルでの意味・機能の側面での気づきの可能性を論じます。機能的な観点での分析の眼鏡 (Macken-Horarik et al., *Functional Grammatics*, Routledge, 2018) を得ると、キング牧師の“I have a dream”の繰り返しと他のスピーチの共通点が見えてきます。加えて、言語学習の過程で気づきの内実がどう変容していくか、Christie and Derewiankaの *School discourse* (Continuum, 2010)を参考に、学校教育の中での縦断的な把握を展望します。

巨理陽一 講師プロフィール

中京大学国際学部教授。中部地区英語教育学会、外国語教育メディア学会関西支部運営委員を務めた後、現在、一般社団法人ことばの教育理事、日本教育方法学会理事。著書に『どうする、小学校英語? --- 狂騒曲のあとさき』（慶應義塾大学出版会、2021年、大津由紀雄との共編）、『英語教育のエビデンス』（研究社、2021年、共著）など。